クリスマス、忘年会、ホムパ、帰省。楽しい予定がいっぱい!

TOKYO CALENDAR

東京カレンダー

January 2020
no.222
定価 815YEN

1

Cover
桐谷美玲
Mirei Kiritani
結婚したから強くなれた

SPECIAL INTERVIEW
成田 凌
男の色香について考える。

「ひとりでバー」ってアリですか?——松本まりか

イブに「最高の歌声」を届けたい。——久保田利伸

SPECIAL TALK
インテリアデザイナー
吉田恵美

素敵な年末にしたい

＊今年最高の日にしたいから「**クリスマスイブはフレンチ**」
＊鉄板焼き、イタリアン、割烹まで。大人は「**穴場**」でクリスマスを過ごす
＊「**忘年会**」を兼ねた“大人の女子会”は、贅沢に、スタイリッシュに
＊「**ホムパ**」にお呼ばれしたら、ホストを立てる絶妙な「手土産」がいい
＊2020年の始まりは気持ちよく。「**大人のお年賀**」10選

東京の最旬情報だけ集めました
東カレジャーナル
好評連載中

金丸恭文の
Special
Talk

2020年のニューリーダーたちに告ぐ

File. 62

インテリアデザイナー

吉田恵美（さとみ）

少しだけはみ出してみたい その好奇心が斬新なデザインを生んだ

学校ではあまり目立たない生徒だったという吉田恵美氏。そんな吉田氏が突然海外留学を決意したのは、
予備校で出会った講師のグローバルな視点に触れ、“もっと広い世界を見たい”と思ったから。
英語が通じないことを恐れずアメリカに飛び込み、留学で訪れたチェコで東欧建築に衝撃を受け、インテリアデザイナーの道へ。
多種多様な文化を取り入れながらも「和」を生かした作品を次々に手掛け、洗練されたスタイルと時代を超越した美しいデザインで
世界を舞台に活躍する。福岡県の地方都市で、ごく一般的な家庭に生まれた吉田氏が、なぜ世界的なデザイナーに上り詰めることができたのか。
その歩みを振り返りながら、次世代のリーダーたちが成長するために何が必要かを探る。

ホスト・金丸恭文 ［フューチャー株式会社 代表取締役会長兼社長］

Photos/Nobuhiro Shimoyama, Proofreading/Yuki Kobune

金丸　今日はデザインスタジオＹＺＤＡを主宰するインテリアデザイナー、吉田恵美さんをお呼びしました。お忙しいところ、ありがとうございます。

吉田　こちらこそお呼びいただき光栄です。

金丸　本日は広尾の『鮨 在（ざい）』でお話を伺います。伝統を重んじながらも挑戦を忘れず、鮨を引き立てるペアリングを提案してくれるのも魅力とのこと。オープンは今年５月ですが、すでにかなりの人気店だと聞いています。

吉田　楽しみです。私はよく食べるので驚かれるかもしれません（笑）。

金丸　早速ですが、吉田さんは基本的にはアメリカで活動されているんですよね。

吉田　ニュージャージー州とマンハッタンを拠点に活動していますが、イタリアやオーストラリアでもプロジェクトを手掛けています。昨年は東京にもオフィスを構えました。お声がかかれば世界中どこにでも行きますよ。

金丸　アメリカでの生活は長いのですか？

吉田　大学からなので、もう30年以上になります。

金丸　そんなに！

吉田　日本に来ることは、年に数回ぐらいで。最近になってようやく日本でも知られるようになったので、完全に逆輸入ですね（笑）。

金丸　ここ数年、Ｈｏｕｚｚ（住宅デザインやインテリアなどの世界最大の情報サイト）の賞を連続で受賞されているとか。

吉田　お陰様で２０１４年から受賞しています。17年まではベストオブデザインサービス賞を、去年と今年はベストオブデザイン賞をいただきました。

金丸　素晴らしいですね。インテリ

よしだ・さとみ　米国アイオワ州立大学芸術学部、インテリアデザイン科の学士課程を首席で1994年に卒業後、米国の大手建築会社、NBBJ Architects、GGLO Architecture + Design、IDI and Anshen + Allen に勤務。2005年に独立し、デザインスタジオ YZDA（Yoshida + Zanon Design Atrium）を創業。米国ニュージャージー州とニューヨーク州に拠点をおき活躍中。好奇心と多様なデザイン経験を元に、ホテル、レストラン、オフィス、個人邸宅やマンションなどを、トレンドに左右されすぎることなく、スタイリッシュなデザインに創りあげる。2018年に東京オフィスを設立。

「向上のエンジンは好奇心 自分の思いに従った行動が世界を広げる」（金丸）

アデザイナーといっても、馴染みのない読者も多いと思います。具体的にどのようなお仕事をされているのか教えていただけますか？

吉田　日本だとホテルやレストランといった商業デザインはよく知られていますが、私が手掛けているのは、高級な戸建て住宅やコンドミニアム、ペントハウスが中心です。短くて9ヶ月、長くて2年半、クライアントの話を聞きながら、その人に合ったデザインを考え抜き、ただインテリアを選ぶだけでなく、心に響く空間を作るためにトータルでサポートしています。

金丸　施主が個人だと、商業デザインとは違った難しさがありそうですね。

吉田　そうですね。アメリカは日本よりもデザインやリノベーションについて意識が高く、とことんこだわりたい人が多いです。

金丸　相手は富裕層で、しかも吉田さんの仕事を知って、「この人に頼みたい」と依頼してくる。自然と要求される仕事のレベルも高くなりそうですが。

吉田　細やかな仕事ですし、いつも締め切りを抱えていて、なかなか大変ですよ（笑）。クライアントは妥協してくれませんので、何がきっかけで「もう結構」と言われるかもしれません。お陰様で今のところ、たくさんお声がけいただいていますが、いつ"旬"が終わるかもわからない。いつも崖っぷちに立っている心境です。

金丸　実力社会のアメリカでフリーで活躍できるのは、本当のプロフェッショナルだと思います。今日は吉田さんの生い立ちから、どのように今の地位を築かれたのか、じっくり伺いたいと思いますので、よろしくお願いします。

目立たない子どもだが「一歩はみ出してみたかった」

金丸　お生まれはどちらでしょう？

吉田　福岡県の北九州市です。

金丸　周りにデザインや絵が得意な方がいらしたんですか？

吉田　それが、誰もいないんですよ。親戚一同、建築家もデザイナーもいません（笑）。芸術っぽいことといえば、4歳から始めた書道くらい。家族みんなでやっていました。あとは8歳から剣道を。

金丸　書道を家族みんなで？

吉田　はい、我が家は日曜日に家族で過ごす時間があったんです。みんなで洋間に集まって、2〜3時間好きなことをするという決まりで。だから書道をやってもいいし、手芸をしてもいいし、とにかく家族でクリエイティブなことをする時間でした。

金丸　それは楽しそうですね。剣道もされていたとのことですが、吉田さんは背も高いし、足も速そうです。

吉田　走るのと球技は大の苦手で。だから体育よりも美術のほうが好きでした。でも、それを仕事にしようという感覚はなかったですね。

金丸　学校では、目立つほうでしたか？

吉田　いえ、目立ってはいなかったし、あまり目立ちたいという思いもなくて。でも目立つんだったら、普通の人と違う目立ち方をしたい、というのは昔からあったかもしれませんね。

金丸　では周りの流行には影響されないタイプ？

吉田　流されなかったです。むしろ、逆行していました（笑）。たとえばピンクの自転車が人気だったら、ブルーの自転車が欲しいというような。

金丸　天の邪鬼タイプだ（笑）。

吉田　だから、みんなが一列に並んでいるのを見ると、「一歩だけはみ出してみたいな」と思ったり。

金丸　日本に生まれながら、日本ではなくアメリカで成功しているわけですから、実際には何歩もはみ出していますよね。美術を仕事にとは思っていなかったそうですが、子どもの頃は何になりたかったのですか？

吉田　医療系の仕事をしたいと思っていました。母方の祖父がガンになり、祖母が認知症になったのがきっかけで。そう思ったのは、正義感とか使命感があったからなのかもしれません。

金丸　今とはまったく違う方向を見ていたんですね。それなのに、なぜアメリカに？

吉田　それは、大学受験に失敗したからです。予備校に通ったんですが、そこの英語の先生の授業が本当に面白くて。その先生は日本人なんですが、奥様がフランス人で、すごくグローバルな視点を持った方でした。

金丸　その先生の影響で、海外を見てみたくなった？

吉田　そうです。これまで地方都市の狭い世界で生きてきた私にとって、その先生は初めて接する"海外の人"というか、先生のお話にすごく引き寄せられて、「私も外にはみ出してみよう」と思ったんです。

突然のアメリカ留学 言葉がだめなら絵で伝える

金丸　しかし、浪人生の身分だと、すぐさま海外というわけにもいかないですよね。

吉田　いえ、すぐに行動しました（笑）。私はやると決めたら、絶対に行動に移すタイプなので。

金丸　思い立ったら即行動なんですね。でも実際のところ、どうやって海外に？

吉田　試験に合格すれば親も「ノー」とは言えないだろうと思い、留学するとは言わないまま、TOEFLの勉強をがむしゃらにしました。よい点数を取れば、海外の大学が受験できるので。

金丸　とはいえ、どこかの段階でバレますよね。ご両親の反応はどうでした？

吉田　父は3ヶ月ほど口をきいてくれませんでした。

金丸　すごく怒っちゃった（笑）。

吉田　でも「この子は一度言い出したら絶対に譲らないから」と、父のほうが先に折れて。

金丸　そういう性格なのは、お父様もわかっていたんですね。

吉田　剣道も自分の意志ではなく、たまたま近所に剣道場があったから始めたんですが、でもやり始めたら試合で勝ちたいし、大会に出るなら優勝したい。結構、負けん気が強いんです。

金丸　留学先をアメリカにしたのは、何か理由があるんですか？

吉田　テレビの報道番組で聞くような、くせのないアメリカ英語がいいなと思ったので。

金丸　大学はどちらに？

吉田　ミネソタ州のワーリントンという、本当に田舎の小さな町にある短大です。

金丸　意外ですね。ニューヨークのような大都市ではなく？

レジデンシャルデザインとして高級住宅（戸建て）、コンドミニアム、ペントハウスなどを中心にデザインを手掛ける。内装設計からスタイリング、家具デザインなどインテリア空間のトータルプロデュースも行っている

吉田　私が留学した80年代後半から90年代前半にかけて、ちょうど留学ブームが起きていました。私もそのブームに乗っかってはいるんですが、これもまた逆行というか、日本人が大勢いるニューヨークやカリフォルニアはちょっとな、と思いまして。

金丸　せっかく行くなら、周りに日本人がいない環境がいいと。

吉田　ええ。短期間で父から承諾を得ての留学だったので、英語が万全というわけでもないし、とにかく早く英語を話せるようになりたかったんです。

金丸　あとは実践あるのみ。

吉田　だからこそ、日本人がいない短大を選びました。スーツケースのなかに大きな辞書を入れて、とにかく現地に行って学ぼう、と飛び込みました。

金丸　しかし、自分で選んだとはいえ、周りに日本人が誰もいない環境のなか、最初はどうでしたか？

吉田　カルチャーショックというか、まずコミュニケーションが取れませんでした。私は語学留学ではないので、初日から正規の授業に出席したのですが、英語が全然聞き取れないし、しゃべれなくて。

金丸　英語はまず聞く耳ができていないといけませんから。英語が話せないうちは、どうやってコミュニケーションを取ったのですか？

吉田　私の英語力だと、「トイレに行きたい」すら通じませんでした。だったら、言葉以外で伝えるしかない。携帯電話なんてない時代でしたから、トイレに行きたければ、紙にトイレの絵を描いて「これだ」と見せて。

金丸　それは面白い。

吉田　スケッチブックとペンをいつも持ち歩いていましたね。

金丸　絵はもともと得意だったんですか？

吉田　いいえ、まったく。でも、そうしなければ伝わりませんから。そうやって言葉に頼らず、自分の五感を生かしたやり取りをしていたことで、表現力やコミュニケーション力が磨かれていったように思います。

金丸　知りたいという好奇心を原動力に思い切って飛び込んだからこそ、そこから先の世界が拓けた。吉田さんはそれを体現していますね。

東欧の建築に衝撃を受けインテリアデザインの道へ

金丸　ところで、デザインの話がまだ出てきませんが（笑）。デザインに目覚めたのは、在学中ですか？

吉田　ええ。短大ではリベラルアーツを学んでいました。日本で言うところの「一般教養」ですね。哲学から数学まで、いろいろな分野について総合的に学ぶのですが、特に美術の授業がすごく楽しくて。ある先生が「恵美の感性だったら、デザインも面白いかも」とアドバイスしてくれたんです。

金丸　吉田さんは先生に恵まれていますね。

吉田　言われたときは、そこまで重く受け止めていませんでしたが、在学中にサマースクールで、チェコのプラハを訪れたとき、東欧の建築物を見てすごく感動して。この言語を超えた表現力はいったい何だろう、すごいなと圧倒されました。

金丸　それが、デザインの世界に入るきっかけだったんですか？

吉田　はい。建築のなかでも外観ではなく、いつも自分が触れ合う空間をデザインしたいと思いました。それで「そういうデザインをする人って、なんていう職業なんだろう」と調べてみたら、「インテリアデザイナー」だったんです。

金丸　じゃあ、もともとインテリアデザイナーという職種があることも知らなかったんですね。

吉田　だから本当に遅いスタートでした（笑）。

金丸　言ってみれば、まったくの素人の状態から、どうやって仕事にしていったのですか？

吉田　まずデザインを学ぶために、4年制のアイオワ州立大学に移りました。

金丸　アイオワって、ミネソタの南隣りですよね。やっぱり大都市ではない。

吉田　ミネソタに友達がたくさんいたので居心地がよくて。アメリカでもみんなにびっくりされるんですよ。「恵美はどこの大学行ったの？　えー、アイオワ!?」って（笑）。

金丸　アメリカの人たちも、そういう田舎から吉田さんみたいな人材が輩出されると思っていないんでしょうね（笑）。

吉田　田舎は田舎ですが、アイオワ州立大学は工科大学で、技術系がすごく重んじられていました。設計に使用する「AutoCAD」というソフトウェアに関しては、当時全米のトップを走っていたんですよ。

金丸　じゃあそこで、しっかりと技術を学んで。

吉田　はい。今やデザインの世界も、ソフトウェアの重要性がますます高まっています。私はフリーとして、プロジェクトごとにチームを作っていますが、コラボするデザイナーたちはCADが使えて当たり前ですし、ミーティングはZOOMだし、3Dのデザインもオンライン上で行います。

金丸　感性が求められるデザインの現場にも、新しい技術がどんどん取り入れられているんですね。

吉田　ですから、その基礎となる技術を大学時代に身につけられたのは、とても大きいですね。これまではほかのデザイナー、つまり人との競争でしたが、今は技術との競争が激しくなっています。

金丸　新しい技術が次々に出てくるから、キャッチアップも大変でしょう。

吉田　本当に大変です。今の大学を卒業してくる子たちは、幼い頃からiPadに触れている世代です。履歴書にも様々な技術が10個ぐらいずらーっと並んでいたりする。だからといって、現場力があるかというとまた別の話ですけど、でもやはり新しいものを受け入れ続けていかないと、仕事としては成り立ちません。

金丸　就職は最初からデザイン系を志して？

吉田　はい。インターンシップで大手建築会社に行き、しっかりと現場を学んだこともあって、シアトルの企業に就職できました。それが1994年のことです。まずはアシスタントとして、ホテルやレストランの商業デザインやコンドミニアムを中心とする住宅デザインに携わり、シアトルにあるスターバックス本社の仕事にも参画しました。

金丸　これまで手掛けたなかで、特に思い出深いプロジェクトはありますか？

吉田　4人の女性インテリアデザイナーのチームに選ばれて、サポートに入った、インディアナ州のトランプカジノでしょうか。

金丸　トランプ大統領が作ったカジノリゾートですね。カジノは日本でも今、なにかと話題です。

吉田　カジノのデザインって、本当に特別なんですよ。セキュリティはもちろんですが、喫煙者が多いので、火事を防ぐための独特の規制もあり

ますし。日本の建築家の方がよく「アメリカのインテリアデザイナーって、自由でいいよね」とおっしゃいますが、実はそうでもないんです。

金丸 アメリカでも、いろいろな規制があるんですね。

吉田 私が拠点としているニューヨークには、すごく厳しいコードがあります。日本だと、たとえば小さい子どもが落ちてしまいそうな階段の手摺りのデザインを見かけますが、ニューヨークでは絶対に取り付けられません。それに、ちょっと何かあると「弁護士を呼ぶ」と言われる国ですから、いつも相当な緊張感を持って仕事をしています。今日は笑顔だけど明日はどうなるか、という緊張感の連続です（笑）。

唯一無二のデザイン 成り立たせるのは和の心

金丸 会社勤めのあとフリーになられますが、最初から独立しようと考えていたのですか？

吉田 いずれはフリーで仕事をしてみたいと思っていました。ＹＺＤＡという名前も、もともと会社勤めの頃から使っていたもので、この名義でイタリア人の建築家とコラボしたり、休日を利用して照明や家具を作ったりしていました。

金丸 では、何がきっかけで独立しようと？

吉田 ひとつは結婚ですね。私は欲張りなので、家庭も欲しいし、子どもも欲しい、でも仕事も欲しい。

金丸 なるほど、欲張り（笑）。いいじゃないですか。旦那さんとはどこで知り合ったんですか？

吉田 シアトルです。夫はアウトドアブランドの管理職に就いていて、転勤についていくために結婚しました。シアトルからサンフランシスコに移り住み、その後もデンバー、ロッキー山脈とあちこち行きました。

金丸恭文［フューチャー株式会社 代表取締役会長兼社長］

大阪府生まれ、鹿児島県育ち。神戸大学工学部卒業。
1989年起業、代表取締役就任。

でもそれが自分の強みにもなっていて、その地域になじむ色とかインテリアを提案することができる。転勤を利用して、自分の感性や表現力を高められたといえますね。そして２００５年頃から、レジデンシャルデザイナーを名乗りはじめました。

金丸 吉田さんはアメリカで長年キャリアを築かれていますが、「日本出身」ということが、特別な付加価値になるものなのでしょうか？

吉田 私は「日本人である」ということにそんなにこだわっていませんということもありますから。

金丸 しかし、吉田さんのように個人を相手にしていると、そこできちんと相手の話を聞いて要望を引き出せるかどうかが、とても重要な気がします。

吉田 そうですね。アメリカ人の方はみんな個性が強くて、「ほかの人が持っているのは嫌だ」という人が多い一方で、「あなたの過去の作品を見た。同じものが欲しい」とおっしゃる方もいます。でも私は、基本的に同じデザインはしません。「あなたのもが成長して夫婦ふたりになったら違う家に移るというように、ライフスタイルやライフステージに合わせて引っ越すものだと考えています。ですから、「こういうデザインなら、売却するときも不動産としての価値が上がりますよ」というように、将来的な視点を持ってサポートしています。

金丸 吉田さん自身がどのようなデザインをしたいのかではなく、クライアントの側に立って、将来を見据えた上で総合的にデザインしている。アートとデザイン、心と体、そして技術〝そのすべてが包括された、私にしかできないデザインを提供したい。その個性のひとつが、ほかのデザイナーさんが絶対持ってこられないような日本の陶器だったり絵画だったりしますね。

金丸 なるほど。染物にしても陶器にしても、日本もかつては匠による付加価値が高いものづくりが行われていました。しかし、高度成長期にほとんどのものが工業製品になってしまった。付加価値やデザイン性を捨てたことで低価格競争に巻き込まれ、競争力を失っていったんです。吉田さんの発想は、クライアントに寄り添った究極の一点物ですから、その真逆をいっていますね。

海外から見ることでわかる 日本の地方に眠る可能性

金丸 吉田さんの今後の夢を聞かせていただけますか？

吉田 夢というほど大きなものはありません。私は運良く、目の前にある階段を上っていくことを繰り返して、ここまで来られたと感じています。でも「あれをしたい」「これをしたい」という好奇心はいつもあります。デザインはもちろん、本も書きたいし、講演もしたいですし。

金丸 吉田さんは自分の好奇心に素直ですよね。好奇心がないと人は成長しません。向上のエンジンは好奇心ですから。

吉田 そうですね。好奇心で突き進んできた感じです。思い返すと、「私はこういうことがしたい」と周りの人に伝えて行動に移す、ということを繰り返してきましたね。

金丸 今の日本を見ていて、何か感じることはありますか？

吉田 実は、30年前に日本を出たときから、インテリアの世界ってあまり変わっていないなと感じています。し、クライアントから要求されない限り、無理に日本の「和」を押し出すこともしません。ただ、こだわりがあるとするなら、和の〝心〟の部分です。

金丸 それは、「おもてなし」ということですか？

吉田 はい。アメリカではあまりない、〝とことんサービスする〟という精神です。クライアントのなかには、とてもこだわりが強くて、「ちょっと１時間話を聞いてほしい」と言っていたのが結局10時間かかった、ってライフスタイルやライフステージに合わせてデザインするので、これが欲しくても同じものはつくりません。なぜなら、そのデザインがあなたのライフスタイルに合っているとは言えないから。それよりもより新しく、よりあなたの生活に合ったものをつくってみせます」と伝えています。

金丸 その人の独自性を十分に引き出したデザインを提供しているのですね。素晴らしい。

吉田 それに、アメリカは日本ほど家に対する執着がありません。子ども吉田さんのデザインを見ていると、とてもスッキリしていてモダンな感じがしますし、見た目は和風でなくても、どことなく和を感じます。

吉田 実は日本に来ると、陶器や織物など良いものを見つけたら必ず買って帰ります。どのプロジェクトにも、和を感じさせるアイテムが必ず入っていますね。

金丸 全面に出すのではなく、アクセントとして、ということですか？

吉田 私にはやっぱり唯一無二のデザインを提供したい、という思いがあります。〝アートとデザイン、心と

「やると決めたら、絶対に行動に移す好奇心に突き動かされて生きてきた」（吉田）

金丸　それは進歩がない、ということですか？

吉田　いえ。おそらくデザイナーは自由な発想をしたいけれど、その考え方や視点が日本では受け入れられないのかな、と。

金丸　やっぱり日本人はみんな、列からはみ出したくないんですかね。

吉田　仕事の面で言えば、デザイナーの間でも「日本は世界の商談のなかで一番時間がかかる」と言われています。「イエスマン」という言葉がありますが、日本人は「イエス」と言う割には、物事がなかなか決まっていかないとよく聞きますね。

金丸　それは深刻な問題です。スピードが遅いのは、物事の進め方自体に問題があるわけで、特に未知のものに挑戦しようとするときは、それが顕著に表れる。本来、未知なるものについて精緻な計画なんて存在し得ないんだけど、トライ・アンド・エラーという概念がないから、とにかく計画を立ててしまう。

吉田　でも実態は違うわけですから、計画と実行の間にギャップができておかしなことになりますよね。

金丸　しかも、そのギャップを途中で誰も指摘しないし修正もしないから、最後の最後になって「最初の計画がまずかった」ということになる。計画がまずかったのは途中からわかってるんだから、せめてそこで計画を変えればいいのに、って思いますよね。

吉田　アメリカの場合はまず大きな土台を決めて、そこから細部に入っていきます。スピーチにしても最初に結論を伝えてから、そこに至るプロセスを話します。そうした違いの根本には、アメリカと日本の教育の違いがあるのかもしれません。日本では、一人ひとりがもっと物事を考える力をつける教育が必要じゃないかと。

金丸　そうですね。クリエイティブな思考が必要だと思います。

吉田　でも私は、日本の地方には可能性を感じていますよ。日本に来るたびに、可能な限り日本各地を訪ねるようにしています。素晴らしいものを作っている職人さんやメーカーのみなさんにお会いして、「一緒にお仕事をしませんか？」とチーム作りを呼び掛けているんです。フリーの立場なので、そんなに大きなことはできませんが。

金丸　それは、ひとりで飛び込むんですか？

吉田　ええ。「会ってください」と言って。「ノー」という人はほとんどいません。

金丸　吉田さんは、こうしたいと思ったらすぐ実行に移す決断力と行動力がすごいですよね。私も地方には大きな可能性を感じます。地方には希少価値の高いものがたくさん眠っていますが、ただ向こうからは出てこないので、こちらから引き出さないといけません。

吉田　それに思うのは、日本のいいものを見つけてそのままニューヨークに持っていったとしても、何か違うんですよね。何かが欠けている。だから、私は「グローカル」にありたいと思っています。グローバルな視点で見ながら、ローカルのいいものを生かして地域の発展につなげていく。そんなことを地方の方々と一緒に取り組んでいきたいです。

金丸　吉田さんは受験に失敗したことで、人生が大きく開けました。子どもの学力について心配している親御さんに、何かメッセージをいただけますか？

吉田　実は、子どもの向上心やクリエイティブを育てるインテリアデザインというのがありまして。

金丸　えっ！　めちゃくちゃ興味があります（笑）。

吉田　子どもの動線をデザインするために、部屋のどこに何を配置するかを考えるんです。たとえば「手の届く位置に教科書があるかどうか」だけでも、子どもには大きな影響があります。アメリカでは年齢によって子ども部屋にもいろいろと手を加えるのですが、日本でも部屋が狭いからこそ、工夫の仕方があります。

金丸　生活に密着しているインテリアデザインには、いろいろな可能性があるんですね。今後は日本でも、これまで以上にご活躍されるのを期待しています。本日はお忙しいところ、本当にありがとうございました。

今夜の舞台

『鮨 在』

伝統と革新が共存する極上の江戸前鮨

江戸前鮨の伝統を大切にしながらも、ここでしか味わえない鮨を目指して革新し続けているのが、この『鮨 在』だ。店の由来は「故郷」を意味する「在郷」という言葉から。訪れた客ひとりひとりの心が帰る場所をつくりたいという思いから、名付けられた。その名のとおり上質な空間ながら、大将やソムリエの気さくな人柄が心地良い空気をつくり出している。個室カウンターもあり、プライベートなシーンにも対応する。コースは￥20,000～のおまかせコースのみ。

渋谷区広尾5-3-13 Barbizon86 5F　03-3446-1134　17:30～23:00
㊡日祝　13席